

東洋の思想と宗教 第35号 平成30年(2018)3月 抜刷

ナポリにおける国際シンポジウムの報告

寺 本 亮 晋

ナポリにおける国際シンポジウムの報告

寺 本 亮 晉

一 はじめに

2017年11月27日(月)、イタリアのナポリにある風光明媚な海岸沿いの歴史的地區サントルチアのナポリ東洋大學で、国際シンポジウム「佛教の兩翼を世界に探る」(第2部)が開催された。国際シンポジウムは、大久保良峻先生(早稻田大學)が研究代表を務める科学研究費助成事業、基礎研究(A)「他分野複合の視角から見た日本佛教の國際的研究」の例會で發案され、2016年11月の中國寧波における国際シンポジウム「漢字文化と佛教」並びに浙江省寺院調査と、2017年9月29日に早稻田大學文學學術院にて行われた「佛教の兩翼を世界に探る」(第1部)に續くものである。

同事業は、大久保良峻代表と、上島享(京都大學)、菊地大樹(東京大學)、曾根原理(東北大學)、蓑輪顯量(東京大學)、吉田一彦(名古屋市立大學)の五氏の研究分擔者、そして原田正俊(關西大學)と林淳(愛知學院大學)の二氏の研究協力者で構成されている。

参加者 (50音順)

ジョルジオ・アミトラーノ Giorgio Amitrano (ナポリ東洋大學)、上島享(京都大學)、ジッリオ・エマヌエーレ・ダヴィデ Giglio Emanuele Davide (東京大學大學院)、大久保良峻(早稻田大學)、ジャコメッラ・オロフィノ Giacomella Orofino (ナポリ東洋大學)、キアラ・ギディーニ Chiara Ghidini (ナポリ東洋大學)、菊地大樹(東京大學)、久保田正宏(早稻田大學大學院)、マルタ・サンヴィド Marta Sanvido (ヴェネツィア大學)、フランチェスコ・スフェッラ Francesco Sferra (ナポリ東洋大學)、曾根原理(東北大學)、寺本亮晉(大正大學)、ルチア・

ナポリにおける国際シンポジウムの報告（寺本）

ドルチェ Lucia Dolce（ロンドン大学 SOAS）、日比宣仁（早稲田大学大学院）、アンナ・フィリジェンツィ Anna Filigenzi（ナポリ東洋大学）アレッサンドロ・ポレット Alessandro Poletto（コロンビア大学）、眞鍋智裕（日本学術振興会特別研究員 PD）、荻輪顯量（東京大学）、吉田一彦（名古屋市立大学）、ラウラ・レッテレー Laura Lettere（ローマ大学サピエンツァ校）、ほか二十数名。

二 シンポジウム概要

国際シンポジウム「佛教の兩翼を世界に探る」（第2部）が開催されたナポリ東洋大学の建物は歴史的建造物で、用意して頂いた会議室もまた素晴らしいフレスコの天井畫が描かれていた。

今回のシンポジウムの準備や手配は、キアラ・ギディーニ先生とルチア・ドルチェ先生に大変なお力添えを頂いた。また、ナポリ大学の学生達にも日本人好みの甘さの少ない手作りのお菓子を作って頂き、日本からの参加を歓迎して頂いた。



以下、シンポジウムの進行と各研究発表の概要を報告する。なお、発表は全て英語で行われ、質疑応答は英語と日本語で適宜行われた。

開催セレモニー

9時45分～ ジョルジオ・アミトラノ Giorgio Amitrano（ナポリ東洋大学）
大久保良峻（早稲田大学）
キアラ・ギディーニ Chiara Ghidini（ナポリ東洋大学）

アジアの文化と佛教

討論参加者：ルチア・ドルチェ Lucia Dolce（ロンドン大学 SOAS）

9時55分～ ① The Acceptance of Mindfulness in Medieval Period:

Focusing on the Hossō and Zen Schools

日本中世におけるマインドフルネスの受容

—法相と禪を中心に—

袁輪顯量（東京大學）

10 時 30 分～ ② Buddhism and Nativism: Who are the Bonpos?

ジャコメッタ・オロフィノ Giacomella Orofino（ナポリ東洋大學）

インド佛教の諸相

討論参加者：アンナ・フィリジェンツィ Anna Filigenzi（ナポリ東洋大學）

11 時 45 分～ ③ The Political Cosmos of Late-Indian Buddhists

フランチェスコ・スフェツラ Francesco Sferra（ナポリ東洋大學）

12 時 20 分～ ④ On the Process of the Formulation of the Advaitic Vyūha Theory

アドヴァイタ的ヴィューハ説の形成過程について

眞鍋智裕（日本學術振興會特別研究員 PD）

日本中世佛教の諸相 討論参加者：菊地大樹（東京大學）

14 時 25 分～ ⑤ A Study of the Hokekyō Jikidan shō

『法華經直談鈔』について

曾根原理（東北大學）

14 時 50 分～ ⑥ How Earthquakes Became Tenpen (celestial anomalies).

Buddhism, Onmyōdō and Early Medieval Omenology

アレッサンドロ・ポレット Alessandro Poletto（コロンビア大學）

15 時 18 分～ ⑦ Confessions of a Young Monk from the 15th Century

十五世紀の若い學僧の記録にみえる告白

—死後日蓮に假託された史料の起原について—

ジッリオ・エマヌエーレ・ダヴィデ Giglio Emanuele Davide（東京大學大学院）

中國佛教の諸相

討論参加者：キアラ・ギディーニ Chiara Ghidini（ナポリ東洋大學）

16 時 45 分～ ⑧ Zhili's Account of "Six Identities and Dung Beetles"

ナポリにおける国際シンポジウムの報告（寺本）

四明知禮の蜷蛭六即説について

久保田正宏（早稲田大學大學院）

17 時 5 分～ ⑨ Guanding's Theory of the Seven Types of Two Truths

灌頂の七種二諦説について 日比宣仁（早稲田大學大學院）

17 時 30 分～ ⑩ Perception of Brahmins and Brahmanical Rites in the

Chinese Translation of the Buddhacarita

ラウラ・レッテレー Laura Lettere（ローマ大學サピエンツァ校）

三 研究発表要旨

① The Acceptance of Mindfulness in Medieval Period: Focusing on the
Hossō and Zen Schools

日本中世におけるマインドフルネスの受容 ―法相と禪を中心に―

東京大學 蓑輪顯量

蓑輪氏の発表は、中世における禪宗の行について、法相と禪の異同を考察し、現在のマインドフルネスとの連関について論じたものである。

中世の時代にダルマを初祖とする禪宗が日本に伝わったが、それ以前にも止観の傳統は存在した。南都の法相宗や天台宗の中にその例が見出されるが、明らかに禪宗の傳來によって行が再認識された。中世に於いて注目される人物は、法相宗の解脱貞慶（1155～1213）、良遍（1194～1252）と、禪宗の圓爾弁圓（1202～1280）、蘭溪道隆（1213～1278）である。

貞慶は『心要鈔』や『解脱上人小章集』の中に、言葉を用いながらそれを念佛のように唱える行法を實踐していたことを伝える。また、良遍は、圓爾辨圓の講説を間接的に聞き、そこから法相宗と禪宗の異同を考察する『真心要決』を著述している。その中で、良遍は、無分別の境地を自らの言葉で表現し、法相の悟りと同じものであると主張した。彼の残した表現から、實際の觀察に於いて、念ではなく知に重視が置かれたと推定される。

次いで日本の佛教界に大きな影響を与えたのは、渡來僧の蘭溪道隆である。彼は『坐禪論』という興味深い心の觀察のための手引き書を遺しており、實習のための具體的な方法を平易な形で説いている。これらは、現在のマインドフ

ルネスと同じものと位置づけられるが、技術的な側面だけが注目された可能性があると袁輪氏は指摘する。

② Buddhism and Nativism: Who are the Bonpos?

ナポリ東洋大學 ジャコメッラ・オロフィノ Giacomella Orofino

オロフィノ氏の発表は、チベットにあった佛教傳來以前の土着の宗教であるボン教について、その概観とボン教が佛教へ與えた影響についてのものであった。

先ず、ヒマラヤ高原で出土したマスクの画像を紹介し、その鼻の形状から白人を想起させ、イラン等からの影響を指摘した。ボン教の傳承では、シェンラブ・ミボを始祖として、3種類の傳記が残されている。シェンラブの教義には9つの道（九乗）として、豫言の道・視覚世界の道・幻想の道・存在の道・在家の道・僧侶の道・純粹な音の道・原始のシェンの道・究極の教えがある。

次に、「燃える水」というボン教の傳統の守護と繁榮の儀禮について説明がなされた。ボン教の師は、四季のそれぞれの最初の月の8日目に、白い祭壇の上で、ヤクと羊と山羊の人形やトルマという供物を捧げ、雪解けの水を沸騰させた容器を置いた。また、9つの武器を13の毒で淨化する。最後に、師が貴重でよく飾られたドラムを演奏して、深遠な瞑想状態に入るといのである。

そして、オロフィノ氏はこのようなボン教の研究には、佛教を補完するものか、古代インド・イランの宇宙進化論の構想か、ヴェーダとプラーナ文獻の傳統と平行するものか、といった研究課題が残ることを指摘した。また、西洋の學者だけではなく、これらの問題に直面していた學者を紹介して発表を終えた。

③ The Political Cosmos of Late-Indian Buddhists

ナポリ東洋大學 フランチェスコ・スフェッラ Francesco Sferra

スフェッラ氏の発表は、後期インド佛教の佛教徒にとって、その世界觀を顯す四大州の概念に政治的な影響が見られることを指摘したものである。

一般的に、『阿毘達磨俱舍論』等に説かれる四大州は、黒で示される四角の須彌山を中心に、東に白で半月形の勝身洲、南に青で三角形の瞻部洲、西に赤

く圓形で示される牛貨洲、北に黄色で四角形で示す俱盧洲となっている。また、正量部の視點として『佛說立世阿毘曇論』によれば、東西は圓形になっている。

無比金剛（Anupamavajra）撰『Adikarmapradīpa』は、初發心の菩薩のなすべき1日の所作についての解説書である。36ある項目の中、その第20には器世界觀とも言うべき觀想がある。これによると、須彌山の中央に獅子座があり、それぞれ四州は、東方に白い半月、南方に金色の三角、西方に赤い圓、北方に黒い四角を觀想している。

提婆（9世紀か）に歸される『Caryāmelāpakapradīpa』は、「祕密集會タントラ」聖者流の重要論典の一つであり、實踐階梯を解説する書である。11章ある中、第2章では四大州に言及している。それによると、須彌山は毘盧遮那の加持とし、四大州は、東は阿閼、南は寶生、西は阿彌陀、北は不空成就の加持と記されている。これは、『金剛頂經』系の四佛に相當する。最後に時輪タントラを解説し、以上のような四大州觀は、後期インドの政治的様相が反映されていることを指摘したのである。

④ On the Process of the Formulation of the Advaitic Vyūha Theory

アドヴァイタ的ヴィューハ説の形成過程について

日本學術振興會特別研究員 PD 眞鍋智裕

眞鍋氏の發表は、マドゥスーダナ・サラスヴァティーが説いた特徴的なヴィューハ説を解説し、その源流を考察することでアドヴァイタ教學史に於いての位置を明らかにするものである。

インドにおけるヴィシュヌ教の一派であるパンチャラートラ派（Pāñcarātriśa）の獨特の教義にヴィューハ説がある。このヴィューハ説に對して、アドヴァイタ（Advaita）學派の論者達は、開祖シャンカラ（Śaṅkara, ca. ～756～772～）以來批判を加えてきた。ところが、16世紀に活躍したマドゥスーダナ・サラスヴァティー（Madhusūdana Sarasvatī）は、Paramahansa priyā（PP）に於いて、パンチャラートラ派の主張するヴィューハ説をシャンカラに従ひ批判しつつも、それを換骨奪胎し、「アートマンの四狀態説」というアドヴァイタ教學によって基礎づけられたアドヴァイタ的ヴィューハ説を説いてい

る。

しかし、アドヴァイタ教學史に於いて「アートマンの四状態説」にはいくつかのバリエーションが存在する。眞鍋氏は、そのうち3種の説を取り挙げ、マドゥスーダナがどのような「アートマンの四状態説」を援用してアドヴァイタ的ヴィューハ説を形成したのか、その過程を明らかにした。そこには、アドヴァイタ的ヴィューハ説は、ヴィシュヌ神を対象とする三昧を目的とする理由から、神に關するアートマンを主眼とする構造に移し替えていると結論づけている。

⑤ A Study of the Hokekyō Jikidan shō

『法華經直談鈔』について

東北大學 曾根原理

曾根原氏の発表は、中古天台の學僧である榮心が著した『法華經直談鈔』について、その特徴や現在までの研究結果を廣く紹介したものである。そして、同時期に西洋でも起こった事象について言及した。

『法華經直談鈔』は、16世紀に菅生寺の僧の榮心(1475～1546)が著した『法華經』を談義・講説した注釋書である。本書は、譬話や和歌等を多く含むため、早くから文學研究の対象となった。一方で、同時代の社會的・文化史的な背景との關係の解明は遅れていたが、「直談」の出現をめぐる考察が進む中で、同書を生み出した「場」の性格が注目されつつある。

榮心の活動據點であった菅生寺は、中世日本の代表的な談義所寺院である成菩提院の末寺であった。14～15世紀は、各地を移動し、寫本を閱覽し書寫しながら學問研鑽に勵む多くの學僧が出現した。彼らを迎え入れた學問寺院は「談義所」と呼ばれ、宗派や師弟關係から比較的自由な學問の授受が行われた。その結果として生まれた、佛教學に關する編纂書の一つが『法華經直談鈔』である。

一方、15世紀の西洋キリスト教世界でも聖書の翻譯や新しい説教が起こったことを取り挙げ、曾根原氏は15世紀の日本佛教で起こった談義所や直談の研究成果を基に、同時代に新しい展開が東洋と西洋の人類史で起こったことを指摘した。

⑥ How Earthquakes Became Tenpen (celestial anomalies).

Buddhism, Onmyōdō and Early Medieval Omenology

コロンビア大學 アレッサンドロ・ポレット Alessandro Poletto

ポレット氏の発表は、地震や天災がどのように天變となったのか、佛教や陰陽道、宿曜師との関係から探るものであった。

中世以前の地震は、天人の相關や祟り、怨霊等が原因として考えられていた。鎌倉時代の藤原定家が残した『明月記』は、治承四年（1180）から嘉禎元年（1235）までの56年間にわたる詳細な記録である。これによると、地震の際に金翅鳥や龍神が動いたという記事や、室宿の火神や井宿の帝釋が動いたという記事が見られた。このような地震の起こる理由を列挙した最も早い例は、藤原行成の日記である『権記』の寛弘二年（1006）の記事と考えられる。ただし、以降の永萬二年（1165）までは、地震の原因は天體異常として扱われた。そして、室町期に編纂された辞典である『堪囊鈔』の「地震ノ事」を見ると、地震の起こる理由を『大智度論』から引用しているのである。

最後に、ポレット氏は地震と宿曜師の関係について言及した。『吾妻鏡』によると、地震等の不吉な出来事を避けるために、一字金輪護摩や八字文殊法等を行ったというのである。このように、中世までは地震が起こる理由を佛教の經典や修法から多分に影響を受けていることを指摘し、今後の研究を深めていくと述べた。

⑦ Confessions of a Young Monk from the 15th Century

十五世紀の若い學僧の記録に見える告白

—死後日蓮に假託された史料の起原について—

東京大學大学院 ジッリオ・エマヌエーレ・ダヴィデ Giglio Emanuele Davide

ジッリオ氏の発表は、日蓮假託の『諸法實相抄』について、日宣が『諸法實相傳抄』の中で語る内容を公開した。そして、『諸法實相抄』の記された意義やその研究方法に言及したものである。

先ず、ジッリオ氏は、死後に日蓮（1222～1282）に假託された『諸法實相抄』の新発見とその研究を紹介した。『諸法實相抄』の特徴は、日蓮親筆の資料は

現存していない、『諸法實相抄』で返信したと思われる弟子からの手紙も不明、身延山の歴代法主の寫本「寫本遺文」(1480)でしか傳わらない、『諸法實相抄』への引用を含む古文書は今日まで未発見で、最近の研究も部分的でしかない、寫本遺文がどこまで日蓮の著作として考えてよいかという問題は未解決、等である。

次に、2年前にジッリオ氏が発見した日宣(生没年不詳)の『諸法實相傳抄』を紹介した。これは15世紀後半に著された個人的手記のような資料で、日蓮假託『諸法實相抄』の正體について幾つかの祕密を記している。日宣は、15世紀の關東天台の「談義所」と深く関わった中山・身延門流所屬の學僧による非公開グループに参加していた人物である。そこで、『諸法實相傳抄』解讀を非常に困難な作業にした幾つかの特徴と、資料の構成と思想を紹介し、『諸法實相抄』の正體とその傳承を明らかにする部分を公開した。

最後に、ジッリオ氏は、日宣の手記が初出かどうか知るために、『諸法實相傳抄』以前の口傳書を発見する必要があることと、口傳を書き残した動機を探る必要性を訴えた。そして、『諸法實相抄』が日蓮の弟子達がその思想を復興しようとしたものなのか、他宗や宗内他派との議論のために著されたものなのか、等を再検討する必要があると結んだ。

⑧ Zhili's Account of "Six Identities and Dung Beetles"

四明知禮の蛞蝓六即說について

早稻田大學大學院 久保田正宏

久保田氏の發表は、宋代の中國天台における四明知禮(960～1028)の蛞蝓六即說を扱うもので、この說が形成されていく過程を解明することを目的としていた。

宋代天台の教學を研究する意義の一つは、知禮の教學が後の近世の日本天台に與えた影響を解明することであると強調する。江戸時代の日本天台は、知禮の天台によって一氣に塗り替えられたという。その日本に影響を與えた知禮教學の一つに、蛞蝓六即說という特徴的な教說がある。そもそも、蛞蝓とは糞を主食とする黒い甲蟲、つまり糞蟲である。知禮は、この蛞蝓が天台圓教の行位、六即の最下位の理即だけでなく、最高位の究竟即にもそのまま當て嵌まると主

張したのである。久保田氏は、蛭蛭六即説が知禮に始まるものであるという前提を踏まえつつ、知禮に對する批判と擁護によって、南宋時代にかけて徐々にこの説が形成されていったと指摘した。

発表では、先ず、天台智顗（538～597）に始まる六即の基本説が概説され、唐代の荊溪湛然（711～782）の解釋も説明された。その上で、『觀無量壽佛經疏妙宗鈔』に説示される知禮の蛭蛭六即説を紹介し、知禮と對立する山外派の梵天咸潤（生没年不詳）による知禮への批判と、淨覺仁岳（992～1064）による知禮説の擁護の様子も示した。こうした知禮説への批判と擁護により、知禮の蛭蛭六即説が、章安灌頂（561～632）撰『大般涅槃經疏』の説と結び付けられたことが重要であるという。さらに、久保田氏は、南宋時代の竹庵可觀（1092～1182）や柏庭善月（1149～1241）等によって、蛭蛭六即説が宣揚されるだけでなく、理論が補強され、發展していく實態を解明しようと試みた。

⑨ Guanding's Theory of the Seven Types of Two Truths

灌頂の七種二諦説について

早稻田大學大学院 日比宣仁

日比氏の発表は、天台教學の繼承に於いて、灌頂（561～632）が學説の理論的側面よりも、師である智顗（538～597）の説への權威づけに重きを置くことを指摘するものである。

日比氏によれば、灌頂の七種二諦説は、灌頂撰『大般涅槃經疏』に説かれる。同説は、内容の一致はともかく、『法華玄義』に於いて智顗によって提唱されたとされる七種二諦説と、『涅槃經』に見出すことができる八種の二諦との會通のために作り出されたという。すなわち、灌頂は『大般涅槃經疏』に於いて、『涅槃經』から八種の二諦を見出し、その内、第一の二諦義は餘の七種の二諦義各々に包含されると解釋し、餘の七種の二諦を『法華玄義』の七種二諦に當て嵌め、『涅槃經』の立場から七種二諦説を説く。因みに、『法華玄義』における七種二諦説の七種とは、天台の傳統的な教判論である藏・通・別・圓の四教と、三被接との組み合わせによって成り立つ。

しかしながら、『涅槃經』から八種の二諦を見出すことや、八種を第一種と、餘の七種とに分けて考えること、さらに、餘の七種の二諦を教判論の立場から

理解することなどは、既に地論宗南道派の慧遠（523～592）によって、灌頂以前に示されていたことが今回の発表で明らかにされた。

結論として、灌頂の七種二諦説は、灌頂独自の發想によるとは言えず、理論的整合性を缺いたまま、智顗の學説と、『涅槃經』の説との會通を重視することによって形成されたということを日比氏は指摘した。また、『法華玄義』の七種二諦説との理論的側面の一致に缺ける同説が、後代の學匠に議論の餘地を残すことが述べられた。

⑩ Perception of Brahmins and Brahmanical Rites in the Chinese Translation of the Buddhacarita

ローマ大學サピエンツァ校 ラウラ・レッテーレ Laura Lettere

『ブッダ・チャリタ Buddhacarita』は、馬鳴の著した佛教敘事詩である。佛典のサンスクリット化の先驅とされ、佛教文學を大成したとも言われる。レッテーレ氏の発表は、『ブッダ・チャリタ』を中國に於いて『佛所行讚』として翻譯する際に、特定の語が要約される中、特に婆羅門の語やその儀禮を中心に考察したものである。そして、批判に晒されることもある『佛所行讚』の翻譯の價值は、サンスクリット語の詩との相違にあると主張した。

『佛所行讚』では、官能的な女性の記述や理想的な王の記述、そして婆羅門に關する儀式と習慣の記載といったテーマが、翻譯する際に要約された。特に、王が儀式を執り行い、婆羅門に歸依する描寫が、ほとんど缺落しているのである。これは、婆羅門が佛教翻譯の場に於いて競争相手と認識されていたと假説を立てることができる。寶雲もその一人であるが、南朝の劉宋の庇護によって譯經を行っていた。しかし、歴史書によれば、劉宋の歴代皇帝が呪術に頼っていたことはよく知られている。このため、譯經者達は、王朝の繁榮のために、皇帝のあらゆる種類の儀式に言及することと、婆羅門の思想を支持するような表現を避けるよう導いたと考えられるのである。

以上のように、佛典の翻譯が當時の社會と文化に密接的に關わるものであるため、『佛所行讚』は當時の中國の宗教世界・文化・社會に合わせて翻譯された文獻であり、當時の佛典の翻譯に模範として扱われた文獻であった可能性が

高いとレッテーレ氏は指摘した。

四 博物館・遺跡の見學

今回は、参加者各自がナポリに直接集合したため、シンポジウムの前日の11月26日（日）午後に全員が揃う形になった。そこで、集合した一行は、ナポリの国立考古學博物館へ觀覽に行った。ポンペイ遺跡の貴重なモザイク畫の數々は壯觀で、中でも世界史の教科書等で見られる有名なアレキサンダー大王のモザイク畫が展示してあり、その迫力の前に立ちすくむ程であった。

シンポジウム翌日の11月28日（火）、我々一行は、ナポリ近郊のポンペイ遺跡の見學に向かった。ポンペイの街は、西暦79年8月、ヴェスヴィオ火山の噴火によって、土石流と灰と溶岩の下に埋没した。18世紀になってようやく發掘が進められ、現在は世界遺産として世界中から見學者が集まる。

現地では、キアラ・ギディーニ先生の友人に、廣い街の中を効率よく、また重要な箇所は詳細に案内してもらった。遺跡には、キリスト教以前の宗教をはじめ、當時の風習や生活の痕跡が今も色濃く残っている。フォロ・ジュピターの神殿・フォロの浴場・貴族の家・博物館等々、あっという間に3時間が経ち、まだまだ時間が足りないと感じた。



五 おわりに

今回のシンポジウムは、「佛教の兩翼を世界に探る」と題して、佛教の影響による西洋の最新の研究を探るものであった。イタリア・ナポリでの開催に際し、ナポリ東洋大學の先生方とその學生達が我々を温かく迎えてくださった。改めて御禮を申し上げたい。よく知る先生と久しぶりにお目にかかることができ、また初めて會う先生とも新しい交流ができた。なにより、日頃の成果を披露した發表は、インド・中國・日本の佛教を廣範圍に扱っていたため、参加者

一同は極めて大きな収穫と有意義な時間を過ごせたと言えよう。個人的には、ともすれば宗學の教理に埋没してしまうため、語學も含め視野を広げる大變よい機會となったことは言うまでもない。

ポンペイ遺跡に關する見學も、好天に恵まれ、日本からの參加者にとって大變興味深いものであった。私は以前、2006年2月にローマから日歸りでナポリとポンペイに訪れたことがあった。當時撮影した畫像と見比べてみると、遺跡の至る所が修復され、綺麗に整備されていたのが見て取れた。逆に、もう立ち入れない場所もあり、有名な世界遺産とは言え、遺跡の管理・維持には大變な勞力が必要とされると改めて氣付かされた。

日本から遠く離れた環境で、このようなシンポジウムが成功裡に終えられたことは、參加者一同の協力があったからこそと感じている。そして、このような經驗と交流を、これからの研究に活かしたいと思う。